

フィンランドで学んだ日本の子どもたち

～フィンランドの学校教育を受けた日本の子どもたちの声～

井 上 幸 子

キーワード：フィンランド、学校教育、音楽教育、PISA、教育改革、自己表現

はじめに

フィンランドの音楽教育の独自性については、筆者の専門であるクラリネットの教育プログラムを視点に、先の自著にて展開した。『常葉学園音楽教育センター研究報告集第18号』p.1～13, 平成24年3月25日発行)。クラリネット教育プログラムで見られたフィンランド教育の最大の特徴のひとつに、教育の平等性を挙げた。首都ヘルシンキから北極圏のラップランドにおける広くフィンランド全土の隅々の小都市に至るまで、フィンランドでは平等な音楽教育の機会を与えることを徹底していた。このような平等性を重視する背景には、福祉の充実による個々の経済格差が大きいことや、文化的均質、所得の再分配なども指摘されるほか、学校のほぼ全てが公立であるということも特徴の一つとして挙げられた。

専門教育で全土を挙げた平等教育が成されているなかで、義務教育である学校教育については、どうであるか。2003年に行われたOECDによるPISA (Programme for International Student Assessment)で、フィンランドは読解力などの項目を中心に世界トップレベルの学力を示した要因の一つとして、落ちこぼれを作らない教育姿勢が調査結果として挙げられた。平均点調査であるPISAにおいて、成績上位と下位の差が小さかったことが、全体平均を上げた好成績に繋がったものとされる。

先日、小中学校時代をフィンランドのヘルシンキ市で過ごし、フィンランドの学校教育を実際に体験した日本の子どもたちに、10年の時を経て日本で集まってもらう機会を得た。この子どもたちは、筆者が、フィンランド留学時代の1998年から2005年の間、ヘルシンキ日本語補習学校の小学校と中学校の教員をしていた時に担任をしていた子どもたちである。

日本語補習学校とは、フィンランドで暮らす日本人の子どもたちのために、毎週土曜日に、日本の小学校・中学校（小1～中3）に相当する国語授業を行う教育機関である。生徒数約90名弱の小さな学校で、幼稚園年長クラスに相当する幼稚部も併設されており、運営は、保護者から毎年選出された運営委員会で行い、保護者による積極的な運営参加が学校活動の基本となっていた。運営経費は日本政府等の助成金と保護者負担金、及び有志による各種イベント参加での収益寄付金でまかない、日本の年度にあわせて、4月1日から翌年3月31日までが一年度、夏休みや祝日等はフィンランド現地校と同じで、運動会、遠足、クリスマス会などの行事もあった。

それぞれの学業の道を経て、10年後に、自らが受けたフィンランドの学校教育を振り返ってもらい、今思い出して感じることを、言葉にしてもらった。本紀要では、フィンランド教育調査の研究ノートとして、彼らの生の言葉を記すことで、本調査を行う方たちへの一資料としての位置づけで提供したい。

1. フィンランドで学んだ子どもたち

6名のかつての教え子たちにインタビューをすることができた。内容を会話形式で起こして行きたい。以下はインタビュー協力者について。(括弧内は、性別、年齢、フィンランドにいた時期、フィンランドで教育を受けた学年、現在在籍する教育機関)

1. Aさん(女性、24歳、00年～現在、小3～現在、シベリウス音楽院ヴィオラ科2年)
2. Bさん(女性、22歳、04年夏～07年夏、小6夏～中3夏、上智大学 外国学部 イスパニア語学科4年)
3. Cさん(男性、19歳、03年秋～06年秋、小2秋～小5秋、拓殖大学 外国学部 英米語学科1年)
4. Dさん(男性、21歳、03年秋～06年秋、小5秋～中2秋、エディンバラ大学 理工学部 数学学科4年)
5. Eさん(男性、21歳、04年春～07年夏、小6春～中3夏、東京理科大学 理工学部 建築学科3年)
6. Fさん(男性、21歳、03年春～06年冬、小5春～中2冬、早稲田大学 国際教養学部4年)

1.1 日本の学校教育とフィンランドの学校教育の違いについて

インタビュー1：AさんとBさんの対談

Aさん(以下、A)：いわゆる「オブジェクティブ」か「サブジェクティブ」の違いであると思います。日本の場合は、とにかく先生が生徒に知識を注ぐという感じですが、フィンランドの場合は、どちらかというと、互いにあげたり、受け取ったりすることが大切にされていました。授業中に自分の考えを求められる機会もとても多く、先生から一方的に、上から何かを教えられるという教育は、あまり受けた覚えがありません。

Bさん(以下、B)：そのためにも、とにかく能動的にならないと行けませんでした。日本では、授業中はただ座って、先生の話聞いて、問題を解いて、家に帰ってからは宿題のドリルをやって、塾に行っていく感じでしたが、フィンランドでは、教室での生きた教育が主軸でした。

A：ディスカッションでは、先生も、生徒に必ずしも正しい答えだけを求めているのではなく、むしろ個性的な答えが歓迎されました。自分の発想にはないようなことを生徒に質問された時には、先生はとてもテンションが上がっていました。逆に、あまりに無難な回答を述べた場合は、オリジナリティのなさからか、先生はあまり良い反応を示しませんでした。教師に好かれる生徒というのは、いわゆる「うるさい」タイプの個性派の生徒であったように思います。

B：何か聞かれたら、自分の意見をすぐに固めて、どんどん話さなくては行けないということに一番戸惑いました。発言する機会がとても多かったので、思うように発言できるようになるために、語学に苦労しました。先生は、何でも言いやすい雰囲気を作ってくれていたのですが、意見は言いやすかったのですが、最初は、やはりとても難しかったです。今でも、パッとなかなか言えないことも多いのに、小学6年生でそれを求められたのは大変でした。意見の内容も、日本にいた時は、皆が考えそうな無難な考えを代表して話すということが多かったのですが、フィンランドでは自分個人が思ったことを自由に言うという感じでした。フィンランド人のクラスメイトの考え方や意見もとても勉強になったし、彼らの意見の伝え方とい

うのを見て聞いて、とても勉強になりました。

A:日本人とフィンランド人の考え方の一番大きな違いは、日本人は何を言おうとするにも、常に安全な所に居ようとするのがすごくあると思います。本心の意見がなかなかかわらないことが多いし、それを引き出すのがとても大変です。一緒に話していて、無難にはまとも

B:日本人は、日本という狭い所で密集して生きているから、お互いのことをすごく考えて、話し方一つとっても、敬語などを含め、言葉の使い方もとても気を遣って生きていると思います。

A:団体行動のとても大切な国だから、それを乱さないための努力はとてもするけれど、何か目立って自分がやろうという気持ちはあまりないのではないかなと思います。

1.2 自己表現について

B:自己表現の機会も、少ないように思います。フィンランドの学校行事で、年に何度か「タレントショー」というのがありました。日本で、もし同じ学校行事があったなら、すごく上手な人や、この人は天才なんじゃないかと思うような人、きっとこのまま本物のタレントになれるのではないかと思うほどに何か秀でた芸を持った人しか人前に出て来る勇気がない可能性があります。フィンランドでは、始めたばかりの拙いピアノであっても、完成度などは全く度外視で堂々と人前に出て来るし、自分が楽しむだけの仕掛けしかないような単純な手品であっても平気で披露するし、自分が楽しいと思うことを、皆の前でパフォーマンスしたいからやる、という発想でした。

A:何でもいから自己アピールすることの重要性を学びました。先生も、もし静かな子がいれば、わざと目を合わせて「あなたはどう思うの?」と、ぐんぐん聞きに来ました。全員になるべく話す機会をあげたいという気持ちもあったのですが、静かに黙っているということは、あまりいいことではないということを、暗に教えられました。

B:自分が何も活動をしなくて終わる授業というのは、絶対にありませんでした。日本では、先生に当てられないように下を向いたりして、可能な限り存在を消すということをするところがあるけれど、フィンランドでそれをしたら、むしろ自分が静かであることで目立ってしまいます。自分の存在をアピールしてしまうことになるので、先生は、ここぞとばかりにそういう生徒に向かって近寄って質問をして来ます。このように、黙っていると、余計に難しい所で当てられるから、そのうち先に先にと、ぐいぐい前に出て行くようになりました。答えられる限りの答えは、早いうちに先に答えておいて、積極性で自分の身を守るようになりました。

1.3 フィンランドの学校で特別だと思うシステム

A:例えば、アメリカの学校だと、個人の能力に応じて、特別に何か出来る人のためのスペシャルクラスがたくさんあったりします。英才教育というわけではないけど、個々の長所を伸ばせるだけ伸ばそうというクラスです。クラブ活動も、そのためにあるような学校もあると思います。

B:IB(国際バカロレア International Baccalaureate:世界共通の大学入学資格を目指した教育)とか、ハイレベルとかスタンダードレベルとかも、そうですね。

A：フィンランドには、そういうシステムはないのですが、逆に出来ない子たちのためのサポートが充実しているので、全体的に下から持ち上げようとする傾向はすごくあると思うのです。例えば、小学校だったら、字を読むのが大変な子だったり、ちょっと他の子よりも覚えるのが遅かったりするなどの問題がある子は、その子たちのための特別補講クラスがちゃんとあって、その子たちが授業について行けるようにするためのサポートは、すごく整えられてあると思いました。私も実際に、受けました。私の場合は、小学校3年生で、日本からフィンランドに移住したばかりのフィンランド語があまり話せない時期に、フィンランド語のための特別授業がマンツーマンでありました。毎朝、他の子たちが来る2時間くらい前に登校し、私だけ個人授業でフィンランド語を教えてもらいました。また放課後15時以降に、周りの皆は下校して行く中、私だけはまた1～2時間、特別授業を受けさせてもらって勉強しました。

B：日本だと、それが塾の役割になっているように思います。

A：フィンランドの場合は、特別にお金をかけなくても、学校が、この子には特別にこういうサポートが必要だと個々に判断して、生徒の意思とは関係なく、あなたはここのクラスに行きなさい、あなたはあちらのクラスに行きなさい、という風に補習を強制されました。

B：生徒一人一人をよく見ているということでしょうか。

A：ただ、全員を平等に見ているというわけでもなく、例えば、上の出来る子たちは、自分たちで出来るので、先生はそんなに見ないでほとんど放置していました。あくまでも平均値を上げようとする思考による試みが一番大きいのかなと思います。だから、何かの科目がすごく出来る子とか、得意な子という子には、先生はあまり助けてくれませんでした。

B：日本だと、たとえどこかがわからなくても、わからないまま放置されて、テストとかで悪い点数になったりします。悪い点数になったからといって、先生が特別に何かをしてくれるわけでもなく、自分から言わないと何も始まらないことが多いです。

A：フィンランドでも、高校生以上になると、そういうことは全て自己責任になるので、学校からのサポートも自分から求めない限りは、与えてもらうことはできません。これらのことは、少なくとも中学校までの教育で言えることでした。

1.4 PISA(Programme for International Student Assessment)を実際に受けた感想。(2006年)

A：私は受けましたが、あまり覚えていないのと、数学のテストを受けていた時は、皆、あまりにもわからなさすぎて、テスト中に笑い出してしまった人が続出してしまったことを覚えています。私たちが好成績を取ったという実感はあまりないですね。

B：日本に帰った時に、周りの人から、フィンランドってすごく勉強のできる国だよねと言われても、いや、そういう感じはなかったのではないかなあと答えていました。

A：おそらく、フィンランドで勉強している子たちは、誰一人としてそういう実感はないのではないかなと思います。

B：ただ、冬とかは寒過ぎて、家に籠っているしかない時期がありますので、勉強する機会は多かったのかなと思います。他にやることがなく、しかも、寒いと頭が良く働きました。

A：そういうわけで、PISAの調査結果については、とても驚きました。私としては、なぜアジア諸国が一位ではないのだろうと、疑問に思いました。

B：ただ、平均点を出す調査なので、先ほどの話でもあったように、成績が下の人たちを救

う底上げを頑張っているの、全然出来ないという人がいないから、あの結果が出たのだと思います。

A：そうですね、個人個人で見ると、フィンランドはそんなに上位にいる国ではないと思います。平均値が高かったからだだと思います。極端に出来る子もいなければ、極端に出来ない子もあまりいないということです。現在、フィンランドはもう一位ではなくなっていますが、これは案の定という結果と受け止めました。

B：ただ、フィンランドは、一位になった後、特に何かやり方を変えたりなどして来なかったと思います。

A：本当にそう思います。一位になった後も、特に他国に抜かされないようにする焦りだとか、そういうこともなく、これからも今まで通りやっていけばいいのだ、いいのだろうというマイペースな感じでやっていました。海外に目を向けることもせず、他国が必死に頑張っている中を、ひたすらマイペースで続けて来た結果だと思います。むしろ自国の方針に対する自信が邪魔になってしまったこともあるのかもしれませんが、一位でいようともしていませんでした。

B：アジア諸国は、世界一とか、順位をともなった結果にこだわる傾向もあるので、それで必死になり、成績は総合的に上がったのだと思います。

A：でも、今回の PISA の結果で、アジアはかなり上位に入り、同じ北欧のノルウェーやスウェーデンも上位に入っていたのに、フィンランドだけ入っていなかったの、結構このことが大きく新聞で取り上げられて、国として気にし始めています。そういう反応をするわりには、特に何もしてこなかったと思うのですが、おそらくアジアに負けたということよりも、スウェーデンに負けたということにショックが大きかったのかもしれません。

B：これから、この結果を受けて、また変わるかもしれませんね。

A：そうですね。でも、もしかしたら、フィンランドも最近まで、日本のゆとり教育に近いものがあつたのかもしれません。かなりルーズになっていたなと思う所もありました。

1.5 家庭環境とスマートフォンの普及

B：スマートフォンの普及に関しては、ゲームが入っていると思います。私も今、よくしているゲームがありますが、そこにネット上で登録して出会えるフィンランド人は、本当に多いです。すごく多くて、驚いています。昔は読書をしているフィンランド人がよく目についたと思います。接していて思うのは、エネルギーの使い方が下手なように思います。一つのことをやり始めると、本当に没頭していきます。フィンランドという国にいて、没頭しやすいというのもあると思いますが、ゲームとかにはまってしまうと、とことんはまってしまうそうです。

A：私が小学生の時に携帯電話が普及し始めたので、学校でも、授業中に携帯電話を持って来て、いじっている子どもはよくいました。そういう子たちが、先生に携帯を取り上げられている光景は、よく目にしていました。日本では、同じ頃、小学生ではまだそんなに携帯電話を持っていなかったように思います。フィンランドでは、私たちの世代では、子どもの頃から携帯電話が自分の近くにあるのが普通だったと思います。TV ゲームなどの単純なゲームですら面白かったのは事実ですから、最近、小学生にスマートフォンを持たせている親も多いので、ゲーム環境が手元に移ったことも、結構勉強に影響しているのかもしれない

ん。どこにいても見られる光景になりましたが、例えば小学生がグループで一緒にいるのに、よくよく見ると、皆、自分のスマートフォンを片手に作業している姿を、おかしく見えています。

B：それは、日本でも同じですね。目の前に相手がいるのに、LINEなどで会話をしていたりする。あと、一番驚くのは、フィンランド人は、すごく小さな子でも公共の場で、タバコを吸っていたり、お酒を飲んでいたりします。

A：フィンランドの場合は、共働きの家庭がとて多いので、教育を放棄したとまでは言いませんが、子どもを教育するのは学校の先生の務めだと思っている親が増えて来ているように思います。

B：家では、自分のことを自分で管理しないと、誰も管理してくれない家庭が多いのでしょうか。

A：例えば、子どものいる家庭では、小学生くらいになると、父親も母親も仕事をしていて、子どもが帰る時間には、まだ誰もいなくて、ご飯の時間もいない場合が多いから、インスタント食品やレトルト食品を温めて自分で食べることが多いし、そうになっていくと、必然的に友達と過ごす時間が長くなっていくので、悪い遊びも覚えていくのでしょう。

B：やはり小さい時というのは、勉強しなさいと言われたくはないけれども、言われないとやらない時期があると思います。親が近くにいない状態で、手元にスマートフォンがあれば、ずっと没頭してしまうのかなと思います。

A：私の周りにも、学校の成績で大変優秀な生徒も多くいましたが、そういう子たちは、やはり家族関係がしっかりしていたと思います。たとえ共働きの親だったとしても、きちんと子どものための時間を作っていたし、コミュニケーションがしっかり取れていたと思います。そうではない子は、家庭が離婚しているケースも多いので、母子家庭だったり、父子家庭だったり、そういう風になっていると、コミュニケーションの取り方もまた違ってくるのかなと思いました。

B：この10年でフィンランドの離婚率は、どのくらい変わったのでしょうか。

A：どうでしょう。昔から、離婚率のとても高い国だったから、あまりそれについては変わっていないような気もしますが、最近では、結婚をしないで同棲をしているだけの事実婚も増えて来て、子どもができて結婚しないというカップルも増えているので、そういう関係に子どもが巻き込まれてしまっているのではないかなとも思います。

1.6 フィンランドの授業風景

B：日本だと、ビシッと決められた席にずっと座って授業を受けているという感じですが、フィンランドでは、自分の席にずっと座っていなくても良かったです。教室の一角に絨毯が敷かれていたのですが、先生がある日、そこにソファを持って来て、またある日は、エクササイズに使うような丸い大きな風船も持って来て置いてあって、授業中に授業内容に集中できなくなったら、そこに行って、バンピングしていても良くて、英語の授業で、英語の本を読まなくてはならない時間は、必ず席に座って読まなくてはならないということではなくて、ソファに座って読んでも良かったことになっていました。

A：私の学校では、ソファとかに座っていいという所まではありませんでしたが、席順は自由に決めて良くて、いつも好きな所に座っていました。先生によっては、席を決めていた人もいました。やはり自由な所に座らせてしまうと、落ち着きがなくなったりすることもある

たので、そういう場合は、あらかじめ先生が席順を決めていましたが、その場合は、主に、男女で組まされることが多かったです。あまり話さない子とも積極的にコミュニケーションを取るようにするために配慮だったと思います。自由に決めて良い場合でも、授業を行って進めて行く中で、問題のある生徒がいた場合は、先生の目の届く一番前の場所に移動させられたりしました。

B: フィンランドでは、集中力をどれだけ維持するかに、全力を注いでいたように思います。例えば、私の通っていた学校では、授業中にキシリトールガムを噛んでも良いことになっていて、もしガムを噛んだ方が、集中力が上がるのであれば、それは許可されていました。ただ、子どもだったので、誰からとなく噛み終わったガムを机の裏とかにつけるようになり、それが原因で、ガムを授業中に噛むことは禁止されました。集中力が続けば、ビシッと座って授業を受けなくてはならないということは、ありませんでした。やはり日本の授業というのは、ずっと先生が教科書を読んでいて、生徒はそれを聞いて、特別に沢山発言もしなくてもいいし、それではドリルをやってくださいという感じでしたが、フィンランドでは、徹底して子どもの集中力が最後まで絶対に切れないようにするために、工夫して対面型対話型の授業にしていたのではないかなと思います。当時は、先生が少し楽をしていたような気もしましたが、今考えると、こういう目的だったのではないかなと思います。

A: 日本の友達と学校の授業の話をしていると、日本の子どもたちというのは、よくあの授業中に寝ていたとか、落ちていたとか、そういう話を耳にしますが、フィンランドではそういう風に授業から外れるということは、あり得なくて、特に寝るとのことだけは絶対にあり得ないことでした。もし授業中に寝たとしたら、先生がこれ見よがしに、チョークか何かを投げつけて来て、自分はどうなってしまうかわからないという気持ちでした。ですから寝ようなんていう発想自体、全くあり得なかったし、もし寝てしまったら、クラス 30 人の 1 人になってしまい、よほど、夜中に何かがあって眠れなかったのかと、逆に周りに心配されてしまうと思います。例え、授業がつまらないということはあっても、眠いとか、寝るということは絶対にありませんでした。

B: 私も、日本に帰国して、大学に通い始めて最初に驚いたのは、全員が寝ていることがあり、え！これは、何？と、皆がバタバタバタバタと落ちて行く光景が異常に見えました。日本では、集中力を維持することは、必要ないことなのかもしれないと思いました。

インタビュー 2: B さん、C さん、D さん、E さん、F さんの対談

自由対談: これが良かったなど、フィンランドの教育で記憶していることを、自由に話してください。

B: 何か、これが良かったなということなどは、ありますか？

E: 一番は、授業に参加対する積極性みたいなものがあります。子どもだから、間違った考え方をすることもたくさんあると思います。ですが、それも一つの答えとして先生がいつも受け止めてくれて、間違っているから別に直されるということもないし、それも一つの意見として、常に受け止めてくれる体制がありました。ですから、生徒側も安心して、もし先生に何か聞かれたら、とりあえず全員手を挙げて、そこで自分が選ばれたら、自分の思っていることを自由に発言できる、発言しても良いという雰囲気の環境があったなと感じました。

D: あとは、自分とかグループで、何かを調べて、クラスでプレゼンテーションをする機会

もとても多かったです。フィンランドの教育をはじめ、ヨーロッパでは、与えられたテーマを調べるだけでなく、ある大きなテーマについて、どのような問題があるのかを探るところから始まると思います。プロジェクトなどでテーマはあるものの、何を問題にするのかは自由で、プレゼンテーションなどでは、その問題の答えを大切にするのではなく、資料を使いながら、いかに自分の持っている意見を他の人に納得させることに重点を置いていると思います。レポートなどでもこの様なことが多いです。記憶力だけに頼るのではなく、実際の社会でも、そのまま使えるようなスキルを身につけるための教育方針になっていると感じました。

B：あと、発言する機会が、とても多く、間違っているとか合っているとか、そういうことではなくて、自分の意思を表現するということが自体を目的とし、とても大切にしてくれていました。私が、とても印象的に残っていることは、最初の校外学習の時間で、油絵の絵の具がまだ全然上手に使えなくて、結果的に上手く描けずに謎の絵を描いてしまったのですが、それでも先生が「あなたには、この風景がこのように見えているのね」と褒めて高く評価してくれました。自分のことを何でもいいから表現しようとするのを、一番大切にしてくれたからだと思います。

F：そうですね。あとは、クラスで意見が一極化することはなかったかなと思います。私は中学生の時に、日本に帰って来ましたが、中学の授業で意見を言う場面があったのですが、意見がクラス全員で一つの意見に固まってしまって、僕だけ違う意見になってしまいました。日本では生徒たちが完全に周囲の空気を読んで、自分たちの意見を一極化してしまっているということがあります。フィンランドであれば、そういうことは起きなかったなということは、感じました。そこはやはり、生徒同士の中でも、空気を読み合うという教育が、教育の場として成されているのではないかなと思いました。

D：あと、覚えているのは、先生の雰囲気の違いもあったと思います。先生たちは、皆、明るくて、個を大切にしているという支援体制がとても良かったなと思います。フィンランドと日本の教育で違うと感じたのは、クラスが少人数制で密度が濃かったように思います。授業中でも授業以外でも生徒の話を優先的に聞いてくれました。日本では、教科書にそった授業ですが、フィンランドでは教科書意外に実社会で役立つ授業が多かったです。

B：先生は、確かにとてもフレンドリーでしたね。日本では、先生は、敵とまでは言わないまでも、「先生」対「生徒」という構図でしたが、フィンランドでは、「個」対「個」だったように思います。つまり生徒としてではなく、一人の人間として尊重して扱ってもらえたので、自分という人間に自信が持てるようになりました。その自信は今の私にも活きていて、様々な事に臆することなくチャレンジしていると思います。自己を肯定してもらい、ちゃんと対話してもらった経験がなかったら、今の私はきっといません。

E：そうでしたね。特に小学校六年生とかなれば、クラスも20人くらいで少なかったのもありましたが、一人ひとりを、一つ一つの人格として見てくれ、生徒の意見というよりも、一人の人間の意見として受け止めてくれていたので、先生も一人の人間として、ストレートな真っすぐな答えを僕たちに返してくれました。もちろん先生に評価されたいという気持ちはありましたが、それよりも大切な、自分の気持ちを真っ直ぐに伝えて発言をすると、こういう風に自分は評価されるのだということがわかり、そのことが、また新たに発言しようという励みにもなりましたし、より積極的に授業に関わろうという衝動に繋がりました。

2. フィンランドが教育で功を奏した秘訣

以上のインタビュー結果は、フィンランド教育研究の第一人者である福田の調査結果とも一致する。福田は、フィンランド教育省および教育大臣の見解、国際機関の調査、国際シンポジウムにおける教育関係者たちの発表等の調査をまとめ、フィンランド教育の特徴を以下のように、指摘する。

2.1 平等な教育機会

福田は、第一に、一人ひとりを大切にする平等な教育がなされていることを挙げている。フィンランドでは、義務教育機関である7歳から16歳までは、選別をしない教育が実行されている。このことは、教育の基本は序列づけではなくて、あくまでも、一人ひとりの発達を「支援する」教育であるという理念から成り立っている。さらに、フィンランド学習社会には、どの学習ルートを通っても、学ぶ気になれば誰でもいつでも学べる教育制度が作られていて、学習を保障する社会的なシステムが整えられている。

筆者の留学時代の友人たちも、シベリウス音楽院で演奏家になるための勉強をし、修士課程を終えディプロマを取得した後に、さらに、医学部に入り直し、医者を目指して実際に獣医になったもの、その他、コンピューターゲームのプログラマー、経営学を学んで会社を起こしたものなどがいたが、これらは稀なケースではなくて、至極当たり前のことのように、本人も将来図として口にし、周囲も自然に受け止めていた。

こういった人生選択の発想は、日本では容易に起こりえない。事由の一旦としては、やはり学費の問題がある。学業を続けるには、お金がかかる。しかし、フィンランドでは学業をするものには、いつまでも国の援助が施される。このことは、この後の「教育の無償制」とも結びついてくることであるが、自己の人生設計を、自分の可能性と照らし合わせ、いくらでも変更できる機会があることに驚かされた。

2.2 自ら学ぶ教育理念

第二に、子どもが自ら学ぶことを教育の基本に据えていることを挙げている。学力競争等で学習を強制したりせず、あくまで、自らが学ぶことが基本姿勢となるように教育するのである。学力調査などは、序列づけのために活用されるのではなく、あくまで子どもと教師の支援のために使われ、学校偏差値や、教師の出来不出来を公表することもない。

では、競争なくしてどのように能力差をなくすのかというと、先のインタビュー結果にも出てきていたように、教師による徹底的な補習が行われる。教育量に差をつける方法である。平等の意義は、機会均等を指し、質量均等ではなく、能力均等を目指す教育方針である。また、教育科学者で、CIMO（フィンランド教育省管轄国際交流推進センター）所長であるパシ・サールベルイは、フィンランドの学校教育方針の特徴として、課題早期発見を重視していることを挙げる。サールベルイは、諸外国や他のシステムでは、問題の発生後に手段行使し介入するようになっているが、フィンランドでは、早期介入の重要性を信じ、教育プロセスの初期段階にこそ投資を惜しまないよう、できるだけ迅速に支援の手を差し伸べるように心がけていると述べている。このことは、義務教育期間に特に言えることであるが、国全体の共通意識として根付いているため、義務教育後の学習機会でも、こういった教育姿勢は当たり前のように行われていた。

筆者の体験例としては、留学初年度に必修で取った、フィンランド語を英語で習うという授業で、他欧米諸国からの留学生の言語習得スピードに、全くついていけなかったある日、フィンランド語の先生が、授業後にカフェに誘ってくれた。席につくと、彼女は「このカフェでは、絶対にフィンランド語でしか、話しちゃだめよ」というルールを作り、ひたすら筆者自身について、質問を重ねた。気がつけば、およそ2時間、自分についてフィンランド語でのみ伝え続けることになり、文法的に間違っていれば、先生がその場ですぐに修正してくれた。今思えば、あれが「落ちこぼれを作らない徹底的な補習」だったのかもしれないと、今でもあの時の記憶は強く残っており、この時の経験は、筆者がフィンランド語を話しだす勇気を得たきっかけとなった。語彙が増えたことによる自信は、その後、自らフィンランド語で、フィンランド社会に積極的に関わろうとする姿勢にも繋がった。

また、自主的に学ぶ姿勢を育成するためには、集中力育成は不可欠である。そのための方法の一つとして、子どもたちは、授業中であっても、休む事由が与えられている。先のインタビュー結果にもその様子は語られているが、子どもたちは授業の中であっても、マイペースで学べるように、休む自由も与えられている。また、集中力が持続するのであれば、ソファールにいてもいいし、座る場所は授業によって自由である。

また、自主性育成のために、グループ学習、教え合いを大切にし、子どもが互いの意見から発見し学ぶことも、教育の基本理念に据えている。このことは、「異質生徒集団方式」と「社会構成主義的学習」という教育学理念としても表現されている。

2.3 教師中心の教育行政

第三に、教師の職場環境を挙げている。学校教育が最大の効果を上げられるよう、教育行政は、教師を専門家として信頼し、教師が働きやすい職場環境を整えている。

フィンランドでは、90年代に深刻な不況が続く中、エスコ・アホ政権が大胆な教育改革を実行した。この教育改革で目指したことが、前述の「教育機会の平等」と「自主的個性の伸長」の両立である。

まずフィンランド政府は、中央集権的だった教育制度の大規模な行政改革を始めた。国家の持つ教育管理権限を最小限にし、地方自治体と学校、そして一人一人の教師に教育の権限を譲渡することにしたのである。これにより、1992年に教科書検定の廃止、1994年には大胆な教育改革のカリキュラムの大綱化が実施され、国家による教育規制を大きく緩和し、教育決定権を地方自治体や学校が持つようになった。昨今は、2006年にカリキュラムの改訂が行なわれ、1994年のものと比べると、国家の統制がやや厳しくなったようではあるが、教育行政は、教師が働きやすい環境で仕事することが教育の質を最大に上げることができるとの考えから、教師が子どもの成長を総合的に支援するための専門性を身につけ、それを最大に発揮できるよう、支援を続けている。国家の役割は、大まかな教育内容を学習指導要領にあたる「国家カリキュラム大綱」にまとめ、管理ではなく支援し、それを参考に、地方自治体が地域と学校の実情に適したものに具体化し、学校がさらに指導計画等を決定する。地方自治体は、義務教育については、教育目標、教科課程、学事歴、クラス人数などの細部決定を下す権限を持つことができるが、中等教育では、義務教育と比べると、学校の権限が大きくなり、科目編成や年間の履修計画、休校期間などの決定を下すことができる。

学校や教師に教育権限が譲渡されたため、社会全体の教師への信頼度が増し、社会は教師

とともに問題を解決していこうとする姿勢が備わった。また、教師への信頼度が高い理由には、フィンランドの統一的な教員養成課程制度の充実も挙げられよう。フィンランドで教員になるには、すべての教師に修士号取得を義務づけており、大学(学部)3年、大学院(修士)2年が必要である。さらに、5年間のうち、約半年の20週間という豊富な教育実習の中で職業適性が確かめられる。またフィンランドでは、教職は、医者、弁護士に次いで若者が憧れを寄せる職業の一つである。それは教員が、医者や弁護士などと同等に、高い専門性のある職と見なされ、教養があると認められているからである。フィンランド社会で地位が高く、保護者からも非常に尊敬信頼されるため、その魅力を維持してきた。教員養成課程制度を持つ大学では、どの大学でも、意欲的で最も優秀な生徒を教師の卵として受け入れることができるため、教育レベルの確保もできる。卒業後は、充実した教員養成課程の中で個々が学んだ専門知識や技能、能力を最大に発揮する場も十分に与えられているのである。これらの教師育成の質向上と教育行政改革の成果は、フィンランドの「国際競争力」の向上や経済の好調に現れ、PISA 調査での好成績につながり、世界から注目を集める所以となった。

2.4 教育の無償制

第四として、教育の無償制を挙げる。社会福祉国であるフィンランドでは、教育が「権利としての福祉」として包み込まれている。基礎教育法では、以下のように教育の無償を謳っている。

第31条 授業料の無償

- 1 学習者に対する授業料ならびにその必要条件である教科書、その他の学習資料、作業設備や作業材料は無償である。身障者その他特に支援を必要とする学習者にはこれに加えて無償の教育を受けるための必要要件である通訳や介助者サービス、その他の享受サービス、特殊介護設備そして第39条の効力により規定されたサービスを受ける権利がある。(2003年6月13日、法477)
- 2 授業に出席した者は、授業のある日、その目的とする食事が提供される。

小学校から大学まで、授業料が無料であるだけでなく、高校までは教材や教具(ノート、コンパス、鉛筆などの学用品)、給食、通学費(5km圏外に在住している場合)などの学習環境までもが無料である。学習だけではなく、例として、高校生までは歯医者も無料、乳母車を押している人は、保護者も交通費は無料になる。筆者も大学と大学院に渡り7年間を無償で学ばせて頂いた。結果、フィンランドで学んだ者は、フィンランド国家に育ててもらった意識が強く残る。外国人である筆者自身もその感覚は、今も強く持ち合わせている。

また、教育の無償制により、前述の教育の均等制につながり、自己の人生設計の幅を広く持ち合わせることに繋がる。

おわりに

この度、10年ぶりにかつての教え子たちに再会し、インタビューを通し、彼らが質問によどみなく言葉を綴る姿を見て、人間形成の重要な時期にフィンランドの教育機関で訓練を受けた彼らの、思考力、判断力、表現力の能力の高さに愕然とした。日本からフィンランド

に來たばかりの時期を知っていた教え子たちただだけに、その後、フィンランドの学校教育で採まれ得た高い社会対人スキルに、驚きを隠せなかった。

現在、日本の子どもたちの能力育成課題としてあげられる、課題発見能力の低さ、思考力や活用力の弱さ、文章表現の乏しさ、十分なコミュニケーション能力が育成されていないことや、学んだ知識や技能を活用して自分の生き方に生かせないことなどは、教育現場が共通して抱える深刻な課題であり、それらはもはや、義務教育機関のみならず、高等教育機関にも波及し、大学における専門教育機関においてですらも、大学教員は基本的な人間教育指導を義務化されるのが現状である。

2014年10月、中央教育審議会は、政府の教育再生実行会議が議論を続けていた大学入試改革について、入試選抜方法の改革を促す答申をまとめ、知識量を問う「従来型の学力」を測る入試から、知識を活用し自ら課題を解決できる能力を見る入試に改めることを発表した。

しかしながら、各専門教育への入り口である大学入学試験を、知識活用力や思考力、主体性を評価する入試に転換すべきだと指摘する答申案が、果たして本当に有効であるのかどうかは、疑問が残る。

いずれにせよ、こういった改革の試みが、今後日本の学校教育に影響を与え、将来の日本社会を背負って立つ若者たちの思考力、判断力、表現力を育み、日本教育界の未来が広がることを期待する。

【参考文献】

- 福田誠治『競争やめたら学力世界一 フィンランド教育の成功』朝日新聞出版、2006
福田誠治『競争しても学力行き止まり』朝日新聞出版、2007
福田誠治『フィンランドは教師の育て方がすごい』垂紀書房、2009
米澤利明『求められる学力と教員養成ーフィンランドとの比較を通して』教育デザイン創刊号、2010
岡田眞理子『第2章 フィンランドの行政改革について』東京都議会海外調査団報告、2009
神原敬夫『フィンランドの教育考』2010 <http://homepage3.nifty.com/kkam12/fin>
Finland - Pearson Foundation 対談「フィンランド」www.pearsonfoundation.org
フィンランド教育概要 www.opf.fi